

マリー・ローランサン作《アポリネールの娘》をめぐって

由良茉委(早稲田大学)

マリー・ローランサン(1883-1956)による《アポリネールの娘》(1924頃、名古屋市美術館蔵)は、無地の背景に短い詩と一人の女性が描き込まれた肖像画である。1900年代初め、詩人ギョーム・アポリネール(1880-1918)とローランサンは恋愛関係にあり、その終わりを謳った詩「ミラボー橋」(1912)は広く知られている。アポリネールには生涯子供がいなかったため、没後に描かれた《アポリネールの娘》は注目を集め、度々論考において言及されてきたが、資料の少なさなどから、制作の背景までは十分に検討されてこなかった。本発表では、存在しないはずのアポリネールの娘を、ローランサンが作品として描くに至った理由について、改めて考察したい。

人物の様相に着目すると、顔貌にアポリネールの特徴があらわされているだけでなく、灰色の髪、首元のスカーフのようなモチーフは、ローランサンとアポリネールがそれぞれ制作した別の絵画や詩の中に、似た描写を見出せる。また衣服に関して、全体としてはローランサンの自画像に描かれるドレスと共通する表現だが、ショールのように左半身を覆っている白色と黒色の部分は、これまでに描いたアポリネールのスーツの描写を想起させる色合いであり、二人の姿が一人の女性の中に重ねて投影された可能性が指摘できる。

本作が制作された1920年代初頭のパリでは、荒廃したアポリネールの墓に記念碑を建て直そうとする「アポリネール・モニュメント」プロジェクトが、故人を偲ぶ友人らにより立ち上げられていた。1924年6月、プロジェクトの一環として、墓碑制作の資金集めを目的としたオークションが行われ、終了後にはローランサンの絵画一点が高額で取引されたことが報じられた。オークションの詳細は現時点で不明だが、プロジェクトの中心を担った詩人アンドレ・サルモンが、《アポリネールの娘》の画面上部に詩と署名を記している点は注目される。さらに、本作のカンヴァス裏面に貼られたタンハウザー画廊のステッカーは、当時のパリのアート市場で活動していた画商の関与を示唆し、最初の所有者との橋渡しとなったことをうかがわせる。

これらを踏まえると《アポリネールの娘》は、オークションへの出品を前提に描かれた、ローランサンによるアポリネール追悼のための作品だったのではないだろうか。制作の直前に受けた外科手術により、子供を望めない体となっていたというローランサン自身の境遇も鑑みれば、画家が昔の恋人を思いながら絵筆をとった様子が想像される。《アポリネールの娘》は、アポリネールを偲ぶ多くの芸術家が携わった、オークションという出来事を語る手がかりになるだけでなく、死別を経ても途切れることのない、ローランサンとアポリネールの強い結びつきを見出せる点でも、その重要性が指摘できる。